歴代役員を想う
－その貢献に感謝しつつ－

今仲喜代一先生
桜田巳年二先生
石原　利男先生
飯田　右翼先生
牛丸　　博先生
橋本　隆市先生
山崎　芳郎先生
工藤　泰延先生

今仲喜代一先生

私が終戦後間も無い頃に三井美唄炭鉱病院に勤務することになって、美唄歯科医師会に入会した時、高橋常保会長、今仲吉代一専務理事の執行部であった。今仲先生は、空襲の危険が現実のものとなった昭和19年、20年間開業されていた、東京淀橋区の医院を閉院して、美唄に疎開され駅前に美唄歯科という医院を開業、昭和38年まで20年間、地域医療に尽力された功績は大きく、専務理事２期４年、副会長通算７年の長きにわたって歯会の運営発展につくされた功績は大であった。昭和38年３月３日、医院を扇谷明典先生に譲られ東京練馬区に転出されることとなった。しかし美唄歯科という医院名は現在も、美唄市内に盛業のまま立派に残っているあたり、今仲先生のご人徳と扇谷明典先生の義理がたさのしからしむるものの証明でもあろう。古き良き時代から医院経営を今仲先生独自のご人格と、人あたりのやわらかさで、門前市をなして順風満帆の現在を謳歌されているとしか思えないので、前に20年近く暮らした東京の復興に或いは里心が？と感じたので、東京でご開業されるのですか？とおたずねしてみたところ、また歯医者をするのなら、このまま美唄におります。この仕事が、しみじみと嫌になったので、練馬の田舎で隠居します。とさばさばした如く答えられたのを、意外なお言葉としてお聞きした。

後日もれ伺ったことであるが、小生が昭和36年まで10年程美唄を離れていた間に、今仲先生は、運命のいたずらにほんろうされたとしか言えないような、ご苦労を物心両面に（と言っても今仲先生のことであるから金銭的には、全然心配はなかったと思えるけれど、精神的な面では大変であったと思われる）大変な目に遭わされたとのことで、人生が嫌になられたのかも知れない。昭和36年10年振りに久々で、お会いした今仲先生の、とても10年振りとは思われない程に、お年を召された、お姿（その時は私だけが、そう感じたのかなと思った）に吾が目を、うたがったのは、うそではなかったわけであるが、人生とは淋しいものであるかも知れない。

しかし時間はすべてを水に流してくれるものであるかも知れない。２年程経った或る日飯田先生から、今仲先生が大宮市で開業されたとの話を聞いた。２年間何もしないでいたら、たいくつでしょうもないので、とのことであった。その時のホッとした気持と、案ずるよりうむは易し、先生のご多幸を、お祈りしたのを覚えている。昭和47年２月18日ご他界された。享年77才。大宮の医院は、ご長男の浩二先生（歯科医師）が継がれ、現在ご盛業中とのことである。　　（雨田　実 記）

桜田巳年二先生

桜田先生が、大正15年に開業された年に美唄方面会は出来たようである。北野先生も同年開業されているので、高橋先生が大正７年美唄の草分けとして開業されていたので１度に母町に歯科医院が３軒になった。桜田先生は、方面会幹事を当初から務めており、方面会事務所は幹事宅に置くと定められているのを見ても、世話好きの責任感の強い人であったと思う。方面会幹事とは現在では専務理事と同じ仕事を受持っていたという。私が終戦後間もない頃に三井美唄炭鉱病院に勤務して以来、なにかと随分と、お世話になった。
背の高い、おつむの大変にうすい、鼻の下に髭をたくわえた先生で、いつも優しい眼をされていたのが、特に印象的であったことを、今でも覚えている。

明治24年秋田県、尾去沢の生れであり、幼少の頃からすでに医を志したというから、故郷では、神童であったと思う。若くして青雲の志をいだいて津軽の海を渡り、三菱上芦別炭鉱病院で、医師の助手を務めながら勉学に勉め、関東大震災の時は上京されていたという辺り、医師学課試験受験に行かれたのではと思われる。長期にわたる努力の結果歯科医師国家試験に合格、大正15年合格以来、美唄歯科医師会の中心にあって、戦前から学校検診、要抜去乳歯の抜歯、健康保険の診査等と、

当時としては随分と時代の先端を美唄方面会は歩んでいたと思われる。

私が10年程美唄を離れて、昭和36年再度美唄に戻り開業入会した時は、残念ではあるが桜田先生は、重病のご病気で10年前の私の覚えている先生のお姿ではなかった。その上その後2年足らずで、ご他界されるとは、人生とは、一寸先は闇としか言いようもない、淋しいものであろうか、桜田先生の最大のご不幸は、ご長男の繁美氏（日大歯卒）に33才の若さで先立たれたことと、子供さんを残して早く奥方に亡くなられたことであろう。次男の昭美氏は、美唄歯科医師会、事務局長として健在である。　（雨田　実 記）

石原利男先生

明治39年、会津若松東山温泉に出生。昭和2年大阪歯科医専卒。同5年岡山市で開業。同9年渡満、大連市桃源台で開業。14年、満洲炭鉱KK（満洲国の国営会社）に終戦迄勤務する。

柔道4段、空手3段のほか、幼時母上より手ほどきを受けたとされる、短歌をたしなみ、歌人としても一流で、手八丁、口八丁の文武両道に通じた先生であった。

「短歌は情熱がすべてであり、五体に情熱がみなぎる時、短歌は自ずと浮かぶものである」との持論の持ち主である。何かにつけて「人生だなー」との言葉の為、人生居士の愛称がある。

満洲より引き揚げた時、「船側（ふなはら）に日の丸を見たり、指さして吾子は幾度か吾を見えぐる」を詠む。眼を閉じて、往時を追想し、感無量。この時長男伊織氏8才。

昭和25年、三井美唄炭鉱病院に歯科部長として就任し、美歯会に入会す。

当時の炭鉱病院長、青木金亮先生は会津の同郷で中学の先輩。

「移り来し、社宅の畳冷えびえと吾子と書餉の足に意識す」（山の手社宅にて）

「駅に居て蝦夷の訛を聞く夕べ、静かに雪は降り続きをり」

昭和29年～35年迄、美歯会副会長。昭和36年、三井鉱山病院定年退職につき美歯会退会。

四国坂出市回生病院に転出。

「十年余り勤め住みにし、炭山（やま）を去る、感深けれど　静かにあらむ」

「ひたぶるに、讃岐の空を描きをり、美唄想へば 去り難き今」

四国に移られたあとも、北の国、北海道を偲んで、いくつかの短歌を、道歯会通信に寄せておられる。　（下段の項参照）

「流浪の生活ではあったが、どこで暮らした時も、楽しい思い出は多かった。その追想は帰らぬ流れの様に切ない、感傷に堪えかねた私は、故郷に一生を終わり得る人の幸福をしみじみと考えた事もあった。敗戦となり、満洲より引き揚げ、故郷の生活は必ずしも満ち足りたそれではなかったが。懐かしい思い出の山河を逍遥し、親しい旧知の人々との交際は人生の温かさを味わうに十分だった。 長い間、御交誼を頂いた人々へ、感謝の気持ちを捧げたいだけです。親しかった人々は、微笑み乍ら、私を思い出して下さることを信じつつ」と当時を寄せられている。ご長男伊織氏（大阪歯科大卒）は現在高松市屋島仲町に於いてご盛業中である。

北国の想い出

石原利男

故郷（ふるさと）を遠く離れて来しものか
蝦夷（えぞ）富士に向かひて何か寂しき

吾が性（さが）は流浪（るろう）の運命（さだめ）持つものか
夏雲起る野辺に今日立つ

感傷にひたり通しし吾ながら
蝦夷地の秋は想ひに堪えず

讃岐路にいくつか春を迎えたり
哭くがに偲ぶ北国の空

頬あつき追憶の日よ黄昏れて
島影暗き瀬戸の内海

目閉づれば美唄に住める心地する
讃岐のたつきに馴れし今はも

飯田右翼先生

明治23年７月２日、新潟県新発田市に生まれる。
大正５年日本歯科医専卒。大正12年渡道。北海道炭鉱汽船夕張炭鉱病院に勤務。以来、昭和22年迄、北炭傘下16山の大部分の病院を勤務。
退職時は、万字炭山炭鉱病院。
その後、空知郡奈井江町に開業。昭和32年美唄市東明町に移り、同44年４月迄実に55年に及び歯科医師生活を送られた。
美歯会では、道歯会終身会員第一号。修身一貫、陰に陽に万年青年大老として、明治人の気骨を示された先生であった。
道歯会代議員、美歯会監事の要職を歴任された。
趣味の間口は広く、奥行きの深さにおいても並大抵でなく、茶道は裏千家、華道は草阿弥流の奥伝を受け、日本舞踊は中村流の名取りのほか、清元、歌舞伎、常盤津まで、可ならざるもののない芸の持ち主であった。
スポーツも硬式庭球は五十才近く迄選手として出場。ランニングも日歯大二年の時、のちのオリンピック中距離ランナー蓮見・山内両氏に勝ったことがあるというのが、御自慢であった。

昭和44年、診療所を閉じ、老後は花鳥風月を友としながら、悠々自適の生活を送られたが、昭和57年５月13日、次男博雄氏のもとで（東京）天寿を全うされた。享年92才。

「美唄の思い出」

炭鉱華やかなりし頃は会員数も20数人であったが次々と閉山となり現在は13人に減じた。「夕張歯科医師会も同様」然し少数なだけに派閥もなく一同和やかな事は恐らく全道一と自負して居る。何時の会合でも喧嘩口論は一度もなく、じかに悪口を云っても皆笑いながら聞き流しているのが自慢の一つであろう。

楽しいのは毎年春の学校診査後の一泊旅行である。私の忘れ得ぬは43年小樽の鰊御殿で同地の尾崎君の手配で第一の達者の老妓を呼んで清元保谷を唄ったのは一生の思い出となるだろう。

３４、５年頃か温根湯に如件会があった時、翌日網走に行き原生花園の「はまなす」の花盛りで、その種子を４、５粒持ち帰り家の庭に蒔き４、５年で花咲くようになり、昨年美唄に行き種を持ち帰る心積りであったが、果たし得なかったことは残念であった。

美唄の思い出は尽きないが以上２つは特に印象深いものである。

（昭和50年５月30日発行道歯会通信投稿分より）

牛丸　博先生

昭和23年11月、美唄市我路に開業されて美唄歯科医師会に、入会されて以来、専務理事８年、副会長11年。その間に道歯代議員の重責も歴任され、昭和47年岩見沢市６条西５丁目に移転開業されて現在に至っている。出生地は紋別郡白滝村で製材業を営むご両親の長男として、大正11年出生、北海中学卒業後昭和15年日本歯科医学専門学校入学。昭和18年学徒出陣で満洲へ、終戦は高知県で迎えたとのこと。牛丸先生は、ご両親か或はご先祖の人々が多く善根を積まれた、たまものが先生のまれな程の幸運の星の下に生まれることが出来たのではと思われてならない。「私は良き先輩や同級生の多くの人達にめぐまれて、幸福な人生を味わっている」。とのことであるがその感謝の気持と生活が新しい幸福の到来となって、天地萬物から祝福されるのではないであろうか。先輩に前道歯会長庄内先生、旭川の工藤先生、岩見沢の三嶋先生。同期に旭川の狩野先生、栗山の高橋先生、札幌の本間先生はじめ多くの先生がたと常に固いきずなで結ばれているのも有難い限りというべきでしょう。後輩に対する親分肌の面倒見の良さは、６分の侠気４分の熱そのものであり。読みの深さも素晴らしい、石炭産業が戦後エネルギーの主役であると着眼、我路に開業され、数年を経ずに名実共に美唄第一の医院にした力量、エネルギー革命をいち早く察知して、岩見沢の１等地に管内でトップクラスの規模の医院を開院また後継者の育成と、そのいず

れも着眼の良さと強力な実行力には、唯々驚くばかりである。

牛丸先生の人生に於ける最大の幸運は、トシ夫人との、ご結婚であると思われる。妻を娶らば才長けて見目麗しく情あり。鉄寛の詩そのものの。深窓のやんごとなき姫君を迎えられた時の博先生の顔が、ほほえましく彷彿する。30年程前に「私の家では、お互いに尊敬し合って居るから」と先生から手放しで言われたことがあったけれど、その言葉に私は少しの違和感も感じなかったばかりか、本当のご夫婦とはこのような、お二人を指すのかと少々うらやましかったのを覚えている。

博先生の今日あるのは、決して出すぎることのない、ご夫人の内助のたまものしからしむるところではないでしょうか。内助の功と言う言葉はトシ夫人のためにある言葉かも知れないと書いたら少々ほめすぎかも。博先生年令と共に角がとれて、東京時代を知る人達から、音に聞く牛丸先生？と眼を丸くする人がいたりするかも知れない。

最近は趣味も、侘寂（わびさび）の境地にあるとか、古窯探訪の旅を楽しまれる。石をいだきて野にうたう芭蕉の寂をの三昧境に楽しみを探求される。牛丸先生ご夫妻の生きかたを、ご立派で、うらやましく思いながら、お二方の末長きご幸福を祈念しつつペンを置きます。　（雨田　実 記）

橋本隆市先生

大正６年３月、東京に生まれる。三河以来の直参の家柄の正真正銘の江戸っ子。幼年時代から少年時代迄は、道北の斜里町に育ち、旧制中学後半から、港街　小樽市に移住され、日大歯科を卒業後、元道歯会副会長　東　敏郎先生のもとに修業された。東先生第１号の門下生との事。

その後、札幌に開業されたが、終戦後間もなく炭鉱景気にわく、三井美唄炭鉱病院に勤務する事10数年、美唄を第二の郷里として、美唄市に開業。

昭和28年～昭和35年　美歯会理事、昭和36年～昭和56年迄は、長らく副会長として、扇谷一貫会長、雨田実会長を補佐した。昭和57年には、美唄市市政功労賞を受く。

三井美唄勤務の際には、カメラクラブを結成し、撮影会を催したり、その為の旅行を楽しんだりされていた。

歴史をたずねながら、日本全国を旅行する事が夢と常々語っておられた先生ですが、諸和59年２月心筋梗塞の為、68才というお年で、ご逝去された。

長男昌隆氏は、札幌にてご開業。

山崎芳郎先生

美唄市がまだ沼貝町といわれた頃の大正３年に、お生まれになり、昭和10年日本大学歯科を卒業後、義父にあたる美唄方面会幹事、後、美唄歯科医師会理事の故 桜田巳年二先生の副院長として、研鑽されて、昭和12年月形町に開業された。

戦前・戦中・戦後の五十有余年の長期間にわたって、地域の医療に尽力され、その間、月形町国保運営協議会委員、管内学校医、北海道歯科医師会代議員等の公職を歴任。

地域住民の方々からの信頼はもとより、歯科医師会会員からも、そのお人柄から尊敬を集めた先生だった。

昭和59年には、北海道社会貢献賞を、昭和63年には、厚生大臣賞を授与され、表彰されたのは当然といえよう。

学生時代からビリヤード・マージャンを楽しみ、特にマージャンとは一生のお付き合いであった。

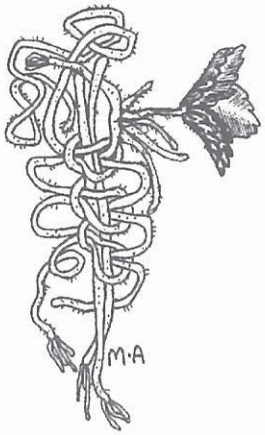
昭和10年代に自動二輪の免許を取って、ハーレーおよびインディアンを乗りこなした後に、国産愛用として陸王に変えられたとか、古き良き時代のモダーンな先生であった。

平成元年夏頃から、体調すぐれず、入院加療中であったが、翌年ご逝去。享年77才。

道衛夫人は、元道歯会監事　本間寿彦氏の御令妹。

長男芳昭氏は札幌市平岸にて、御開業、現在道歯常務理事、二男、道朗氏は東京水道橋で

歯科医院開業中。
美歯会事務長　桜田昭美氏は義弟にあたる。

工藤泰延先生

昭和５年、岩見沢市峰延町の農家にお生まれになり、日大歯学部を卒業後、昭和32年、同級生の岩澤忠正先生（現日大松戸歯学部矯正学教室教授）と日本橋小船町にて、共同開業した。
日本橋での開業は順調であったが、実家の事情により、峰延に帰らざるを得なくなったという。
昭和34年、美唄市峰延町にて開業。当時、医院前の国道12号線はまだ未舗装で、オート三輪が往来し、また峰延町は過疎もなく商店街もにぎやかだったそうです。
昭和36年から、なくなる平成６年迄の長きにわたり、美唄歯科医師会学校保健担当理事、北海道歯科医師政治連盟代表支部者の重責にあった。
平成６年４月１日　脳内出血の為、死去。享年63才。
歯科医師としての絶頂期を経て、その後、幾多の困難をのりこえながらも、子供４人を育てあげた。
長男　孝裕氏は岩見沢市で矯正科開業。
談「家族に厳しく、他人には慈悲深い父でした。患者さんのことは、言うに及ばず、友人などが、困っている時も、誠意をもって対応していたようです。突然の死ではありましたが、なくなる前夜迄好きな酒を飲んでいた事が、父らしくもあり、又、最後迄、歯科医師としてまっとうし、自室の椅子で白衣を着たまま死を迎えたのも父らしくあったように思う。」と語られている。